

月刊ニューズレター

現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第37号 2018年1月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP(最新号とバックナンバーを公開中)
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 大学職員の世界から見えるもの	金澤 冬樹	2
逸話と世評で綴る女子教育史(37) —真言宗のお寺ではじまったキリスト教の女学校—	神辺 靖光	6
1973年度の大東文化大学父兄会定例総会にて —大学側の近況報告—	谷本 宗生	10
明治以降の宗教系私学・宗教界に関する論考② —仏教系私学・日蓮宗を事例として(2)—	雨宮 和輝	12
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(36) 学校沿革史にみる補習科・専攻科(32):岡山県(5)	吉野 剛弘	14
シンポジウム「知られざる明治期日本画と「一高」の倫理・歴史 教育」に参加して	富岡 勝	18
刊行要項(2015年6月15日現在)		22
会員消息		23

コラム
大学職員の世界から
見えるもの

かなざわ ふゆき
金澤 冬樹

(東京理科大学職員)

■なじみの薄い大学職員

大学職員に就職してから間もなく4年になる。もともと学生時代から関心があり、大学教育については学んでいたが、大学職員の立場から見る大学の姿は新鮮なものばかりである。

大学職員(大学事務職員)は、大学の構成員でありながら、大学教員に比べて注目されにくい存在である。大学教員はニュースや新聞で毎日のように目にし、大学に在学したことのある人なら直接に触れあったことがあるだろう。一方で大学職員がマスコミに取り上げられることは少なく、学生と触れ合う機会も限られている。

大学教員に比べてなじみの薄い大学職員だが、自らがその立場になって実感するのは、大学におけるその存在の大きさである。大学が機能していく中で、大学職員が担う役割は非常に大きい。また、大学職員から見る大学の姿は、学外はもちろん大学教員や学生から見る大学の姿とも異なる。大学の在り方が今まで以上に問われている現在、大学職員の役割はますます大きくなるとともに、大学職員の在り方も厳しく問われてくると言えよう。

そういった意味でも、大学職員の存在や視点を多くの人々と共有し、これからの大学を考える際の一つの大きな材料にしていく必要があるだろう。そのような問題意識から、本稿では大学職員について試論的に述べてみたい。なお、もちろんであるが、本稿はあくまで筆者個人の見解である。

■大学職員の特質

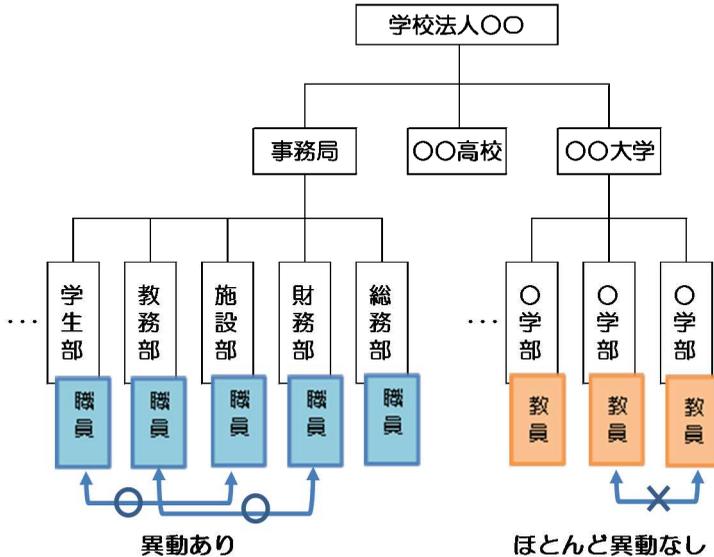
そもそも大学教員と大学職員の違いとは何だろうか。両者の違いを認識することは、大学において両者がどのように機能し、役割を分担していくのかを考える材料になるだろう。ただ、両者の違いは多岐にわたり、一概に論じることは難しい。今回は試みに、3つの点を軸に考えてみたい。なお、大学職員の組織や所属の状況は大学によって異なるので、あくまで総体的な視点で論を進めたい。

①流動性

大学職員の業務は多様である。大学事務組織には主に、総務・人事・広報・財務・施設管理・教務・学生・国際・研究支援などの部署がある。専門職員や技術職員を別にすれば、大学職員はいずれの部署にも異動する可能性

を持っている。学部間での異動がほとんどない大学教員に比べ、大学職員は部署間の異動が頻繁に行われる【図1】。部署経歴(キャリア形成)の違いにより、職員それぞれの大学への向き合い方が変化する可能性も考えられよう。また、情報の共有という面も指摘できる。各職員が異なる部署経歴を有しているので、他部署の状況を把握しやすい。部署が違って、同じ事務組織の一員であり、大学教員に比べて部署を越えた職員同士の交流(情報共有や意見交換)が構造的になされやすいと言えるのではないだろうか。

【図1】大学組織のイメージ



②全体性

大学によって異なるものの、大学教員は学校法人の中の大学(学部・学科)に所属するのに対し、大学職員は学校法人に所属する場合が少なくない【図1】。大学職員の所属する事務組織は法人全体を対象にしている部署が多く、所属の学部・学科の単位を主とする大学教員に比べると、大学全体(法人全体)が対象となる業務を行っている割合が大きいともいえる。各学部担当の教務系部署などは各学部の単位を見据えての業務になるが、①流動性で見たように、大学教員よりも流動性がある大学職員にとって、業務や情報、意識の面からも相対的に大学全体(法人全体)が対象になりやすい可能性がある。

③非専門性

大学職員は大学教員のように、特定分野の専門家ではない。大学の機能である教育や研究で専門分野を活かす大学教員とは異なる立場である。先に述べた通り大学職員の業務は多様であり、一概に「事務の専門家」と言うことも難しい。大学職員は「specialist」か「generalist」かという課題もあり、今後、大学職員と専門性の関係は重要な論点になってくるであろう。

■大学職員と教育(学)

以上大学職員の特質を見てきたが、最後に、大学構成員である大学職員と教育(学)の関わりについても触れてみたい。大学職員と教育(学)について考えるのは、大学職員が担うのは作業効率だけの「事務」ではなく、大学教育という場で行われる「大学事務」という認識からである。ここでも視点を3点に絞って考える。

①大学職員が教育学を学ぶということ

大学は教育の現場である。その中で教育を担うのは大学教員だけではなく、大学職員も教育を担う体制・意識を持たなければならないという議論が近年盛んになってきている^[1]。その中で、大学職員が教育学に学ぶことは重要であろう。大学職員の業務は「事務作業」のイメージが強い。確かに大学職員の業務には効率的な事務作業が必要になるが、一方で「教育現場の事務」という視点があるのも確かだ。実際、私自身も普段仕事をしながら、様々な場面で教育学の蓄積を参考にし、助けられている。大学職員にとって教育学は「+α」ではなく、必須のものと言えるのではないだろうか。特に、大学という存在への理解と反省は、大学職員にとって不可欠な姿勢であろう^[2]。

②大学職員という視点

既述のとおり、大学職員は大学教員や学生とは異なる視点を持っている。大学教育の在り方や課題を考える際、大学職員独自の視点でこそ見えてくる課題などもあるだろう。この視点は独占するものではなく、多くの人々と共有し、今後の大学教育の議論に資していくことが重要である。

③研究対象としての大学職員

従来あまり注目されることのなかった大学職員であるが、近年はその在り方も含め、大学教育研究などの分野で分析が進んでいる。ただ、大学の歴史の中で大学職員がどのような役割を担ってきたのかという、大学職員の「経歴」は必ずしも明らかになっていない^[3]。この「経歴」を踏まえた上で、これか

らの大学において大学職員がどのような役割を果たしていくのかを論じる必要があるだろう。

■学生・大学教員・大学職員の三者

今回は大学職員の特質、教育(学)との関係について考えてみたが、表層的な議論にとどまり、論点も散漫になってしまった。

大学の存在意義が厳しく問われている現在、当事者として大学職員の責任の大きさは日々実感している。学生・大学教員・大学職員の三者は今後どのような関係を築き、それぞれどのような役割を担うべきなのか。本ニューズレターには執筆者・読者ともに大学教員や大学職員という立場の方も多い。ぜひ様々なご意見をいただき、議論を深めることができれば幸いである。

[1]近年、全国の大学において、大学職員が従来とは異なる形で大学教育の現場に関与する様々な取り組みを始めている。「特集 広がる成長支援の担い手～『職員』の力を生かす～」『Between』265号 ベネッセコーポレーション 2015年 p2-19。

[2]寺崎昌男はこれからの大学職員が持つべきリテラシーとして、「大学とは(または大学という職場は)何を特質とする場なのか」「自分の勤務する大学のことをよく知っているか」「大学政策はどう動いているか」という3点を挙げている。寺崎昌男・立教学院職員研究会編著『21世紀の大学:職員の希望とリテラシー』東信堂 2016年 p3-37。

[3]大学職員に関する歴史的研究については、戸村理が先行研究を分析した上で、「これまでの大学史・高等教育史研究において、事務機構や職員層を対象とした歴史的研究は、ほとんど行われていないのが現状」と述べている。戸村理『戦前期早稲田・慶應の経営—近代日本私立高等教育機関における教育と財務の相克』ミネルヴァ書房 2017年 p267-270。

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。**

逸話と世評で綴る女子教育史(37)

—真言宗のお寺ではじまったキリスト教の女学校—

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

明治7(1874)年10月28日の夕暮、サンフランシスコから25日かけて太平洋をわたってきた一人の若い女性が横浜の埠頭に降りた。米国メソジスト教会から派遣された宣教師・スクーンメーカー Dora E.Schoonmakerである。この年のはじめ、インディアナ州のある金持の夫人が日本女性に伝道するために1,000ドルをメソジスト・エピスコパル教会婦人外国伝道局に寄付した。伝道局は、この意志を実現するために宣教師を選考し、ニューヨーク州生れのスクーンメーカーを選んだのである。この年、彼女は23歳であった。



D.E スクーンメーカー

横浜に上陸した彼女は東京築地居留地にいた同宗派の宣教師ソーパー J.Soperをたずね、そこに落着いた。ソーパーは、同派の目的とスクーンメーカーのために校舎を探してくれないかと津田仙に頼んだ。津田仙はこのシリーズにたびたび出てくる人物である。日本初の女子留学生・津田梅子の父であり、東京の麻布に始めての洋式農場・学農社を開き女紅場を附設した人である。スクーンメーカーは梅子の寄寓先であるチャールズ・ランマンの津田仙宛紹介状を持参していた。津田仙はすでに熱烈なキリスト教信者で、日曜日には築地のソーパーの許で礼拝に出席していた。ソーパーの頼みを津田

は快よく引き受け、早速、麻布新堀町の津田邸の隣家、岡田邸を借りることができた。かくて来日後、まもない11月16日には早くもここにスクーンメーカーは女子小学校を開くことができたのである。

女子小学校の看板をかけたものの、生徒がいなくてははじまらない。そこで津田仙は、自分の妻・初子、長女の琴子、姪の岩村千代と知り合いの新井常子、金沢ろくの5人を生徒にした。しかし5人では足りぬと考えた仙はさらに長男・元親、次男の次郎も入学させた。女子小学校とは言うものの、男女ともども、いずれも子どもではない。英語の初歩とはじめて聖書を学ぶのだから初歩学校＝小学校でよいのだろう。

ところが、急にこの岡田邸の主・岡田兵蔵^{あるじ}が死んだので、この屋敷が売り払われることになった。そこで止むなく、一時、津田邸の一室に学校を移し、次いで近くの古寺を津田が学農社の農具工場にしていたものを取り払って、ここを学校にした。明治8年6月頃のことである。ここで毎日、授業をし、日曜日にはソーパーが説教したのである。当時の風景を前出の岩村千代は後年、次のように語っている。

椅子は無く机^{きょうぎ}といっても経机の様なものを並べて勉強したのです。娘は髪を銀杏返しに結び、男性は筒袖を来て教科書もなく、ノートブックなどという気の利いたものはなく、ペンもインクもない。先生だけが大切そうに鉛筆を削っておいでになるのが目について自分達も使って見たくて仕方がなかったのです。学校が始って間もなくクリスマスがありました。樅の木の前で唱歌をやり、自分は“エス我を愛す”を歌い、スクンメーカー先生や津田の叔父夫婦からよく出来たとおほめの言葉をいただきました。プレゼントにはアメリカの人形をもらい、本当に嬉しく感じました

(青山女学院校友会報385・昭和9年)

その年の暮、津田仙の斡旋で、そこから数町離れた三田北寺町にあった真言宗の大聖院を借りることができた。ここに新たに“Salvation School 救世学校”の看板をかけた。当時の生徒の回想記によってその様子をみよう。

ここにきてから生徒がふえた。在籍者35名、うち寄宿生11名だったという。本堂の片隅にカーテンがかけられ、ベットが持ち込まれ、そこが校長スクーンメーカーの寝室兼校長室になった。広い廊下が生徒の寝室兼教室になり、寺の一室が食堂になった。朝6時起床、寺の庫裏を借りて朝食づくり、食堂で朝食、その際、スクーンメーカーは大皿、ナイフ、フォークの洋式で、箸・茶碗を使わせなかった。和食であっても西洋流テーブルマナーを強制したのである。朝の礼拝の後、9時から授業、英語と裁縫・割烹はスクーンメーカーが教え、午前の国語・漢文は日本人教師を招いた。また庭に花壇をつくって花卉を培養した。夕方の入浴はわざわざ洋式風呂桶を外注して野天風呂にした。就寝の折は本堂カーテン内のスクーンメーカー校長に挨拶に行かなねばならぬが、ドアがないため本堂の障子を軽く叩くことを教えられた。習慣が違う日本の娘にとって、苦しいことであったが、西洋文化の一端に触れた楽しさゆえか、スクーンメーカーの評判はよい。

ここ大聖院の住職は寛大というか、無神経というか、本堂に寝台を持ち込まれようが、庫裏や食堂でナイフ・フォークの音がざわめこうが一向、平気であった。一説にはここの住職はクリスチャンの勢いに押されて本堂の隅に小さくなっていたとも云う。しかし法事の時には、このままというわけにもゆかず、その時は読経がすむまで授業を休んで貰った。このような状態が永く続くはずがない。あの寺は耶蘇やそに乗とられたという噂が拡った。真言宗でも黙もくつては置けず、同宗の教務周旋方・松木浄鏝ぼんが、これの解決に乗り出した。明治9年2月26日の「花の都女新聞」に次の記事がある。

三田寺町の大聖院へ先頃ちう耶蘇宗門の女学校開きしに、同じ真言宗の
松本浄^{ママ}ばんと言う和尚さんが大聖院の和尚さんを種々説諭して、とうとう
女学校を取払はせる様に為たと言うことを聞きました

三田の大聖院を追われた救世学校は築地の居留地に移って海岸女学校
になる。これが青山に移転して青山女学院になり、男子系の青山学院に吸収
され、今日の青山学院大学になった。

1973年度の大東文化大学父兄会定例総会にて

—大学側の近況報告—

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

今回は、1961年に大東文化大学の在学生父母、保護者の会として発足した大東文化大学父兄会(2005年、大東文化大学青桐会に名称変更)の、1973年度の大東文化大学父兄会定例総会(1973年5月20日)の様態を皆さんに紹介したいと思う。

大学父兄会の定例総会で、大学側が近況報告(井上学務局長「質のよい学生を」、大西学園事務局長「施設・設備も充実」、鏡就職部長「各地で就職懇談会」)を行っている。

教学面では五十周年記念事業の一環として文学部に教育学科を設け、外国語学部と法学部を新設し、大学院に日本文学専攻と中国学専攻の修士・博士課程、経済学専攻の修士課程を設けるなどの拡充をおこなった。私は昭和七年の本学卒業生であるが、当時では想像もできない発展ぶりである。学生数は九千人で抑えて今年は約二千五百人が入学したが、かなりの入学難だった。質のよい学生を送り出す[ママ]ことが最大の眼目で、来年度からの入学試験はよりむずかしくなろう。入学試験は英語と国語が必修になり、推薦入学制度はなくなるので、いっそう素質のある学生を集められると思う。

(井上学務局長「質のよい学生を」)

学園はこの九月二十日に五十周年を迎えるが、過去五十年を省みるとともに新しい五十年に向けてどうあるべきかを考え、やろうと思いがらできなかったことをこの際やろう、学生たちが自信をもって誇れる大学を実現しようというのが五十周年事業に対する大学の考え方である。第一には教学面の充実であり、さらには施設・設備の拡充である。優秀な教員を充実するとともに今年から授業単位をクラス70名から60名に下げてしっかり勉強できるようにした。施設面では板橋に図書館と研究

室を中心とする記念館を建築中であり、東松山には法学部新設にともなうて約千坪の教室を増設した。板橋には来年にかけて武道館[ママ]を造る計画があり、東松山には本年度中に七十三クラブの各専用室を設けるほか、北側運動場を整備して正規のグラウンドに造成し、一般学生も遊べるようにする。父兄会の記念事業であるゼミセンターは父兄会の寄付を大学がそっくり頂戴することになるが、学生と教授陣がそこで一緒に寝泊りして切磋琢磨し[ママ]することは意思疎通の上でも大きな効果を生むだろう。 (大西学園事務局長「施設・設備も充実」)

実のところ本学の学生は、過去の例だと卒業が迫っても就職の目標がきまらずに、ぎりぎりになってから『どこかいいところはありませんか』といってくるものが少なくない。求人はたくさんある。自分の実力に照して目標がきまれば紹介のしようもあるのだが、自分がどこへ行ったらいいのかわからないのでは困る。今年は初の試みとして九月ごろ、北海道、四国、九州各一カ所、その他(関東地区を除いて)数カ所へ就職部から出張して父兄と懇談する。 (鏡就職部長「各地で就職懇談会」)

それを受けて、父兄会側(会長:鈴木則幸)も「将来の展望に立つての対策」として、次のように述べている。

父兄会発足以来十二年になり、諸物価の高騰によって全予算額に対する事業費の割合は四〇%程度に低下している。このままでは事業費の計上が憂慮され、父兄会運営目的達成に支障をきたすことが予想されるので、この段階で会費改訂を含めて健全財政確立の方策を検討したい。

1973年9月には、大東文化大学は創立50周年を迎えるが、「これ以降、拡大発展してきた学部・学科の増設はにわかにブレーキがかか」(大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)『大東文化大学の歩んできた道』2016年、75頁)つたとされる。石油ショックも発生したこの年は、大学施設の展開などにとってもエポックであったといえるのかもしれない。

明治以降の宗教系私学・宗教界に関する論考②

—仏教系私学・日蓮宗を事例として(2)—

あめみや かずき
雨宮 和輝(早稲田大学)

はじめに

筆者はこれまで、1918年の大学令による宗教系私学の大学昇格に着目してきたが、それより以前の宗教系私学の実態に関しては言及してこなかった。そこで、今号でも、前号に引き続き、大学昇格以前、明治時代以降の宗教系私学及び宗教界にどのような動向があったのかを、日蓮宗を中心として分析することを試みる。

1、日蓮宗大学林の設立から日蓮宗大学への改称までの動向

『大正大学創立三十年記念論叢』(以下、『記念論叢』と表記)には、日蓮宗大学林においても、1903年に制定された専門学校令に準拠する必要があり、宗門教育の質を向上させることが計画された。そして、1904年には開林式が行われた。創立当時の日蓮宗大学林の学内組織は専門科、高等科、中等科によって構成されており、それぞれの修業年限は専門科は2年、高等科は3年、中等科は5年となっていた。また、高等科は一部と二部に分かれ、一部は京都に別置されることになった¹。ただ、この京都に別置された高等科の一部は、1906年には東京の大崎に合併されることになった。このように日蓮宗における教育機関が大きく発展した理由を『記念論叢』では「是れ當時の当局者が能く外世界の進運を察知し内宗門の要求に答へて以て刷新の實を挙げたるの致す所である」²と述べている。

そして、日蓮宗大学林においても当時、他の専門学校がそうであったように、大学への改称が企図されることになった。1907年には日蓮宗大学林の名称を日蓮宗大学に改称後は、学内組織は研究科、大学本科、大学予科、そして、中等科によって構成されることになった。さらに、修業年限一年の予修科を設置し、これは宗門外の普通中学卒業者が日蓮宗大学予科に入ろう

とする者のために、中等科レベルの宗乗、余乗といった仏教に関する学問の教授をする組織であった。また、大学本科においても餘乗の学科目に関しては天台、華嚴真言、俱舍唯識の三学科木の中から一つを選択するようにした。こうした1907年時の大学への改称と共に大きく変革した教育体制に関して『記念論叢』ではそれぞれの学科組織に関して「豫修科の制度はその後依然維持せられ、中等科と相拮抗して良好の成績を挙げて居り、豫科の宗餘乗尊重は仏典の実力養成に多大の成績を挙げて居り、本科の分科制度は佛教学の専攻に最も適切なるものであった」³として、新たな学科組織の構成が日蓮宗の教育機関として、また、宗門内部で仏教に携わる人材の養成機関として有用に機能したことを述べている。

おわりに

以上のように、日蓮宗では日蓮宗大学林として設立された後は「外世界の進運」を踏まえて、教育機関として発展させるように計画したことがわかった。特に1907年の大学への改称以降は学科組織を大きく変化させ、さらに、各学科組織が個別に役割を担うようになった。また、学生が学ぶ内容に関しても、仏教に対する研究が進むように改善されたと見ることができる。

このように、大学改称後においては、宗門内部の僧侶養成だけでなく、仏教学の研究といった側面にも貢献する、さらに、宗門外部からの入学者にも対応することができるような学科組織構成となった。大学昇格以前に既に教育機関としての向上が目指されており、学科組織構成が、後に大学昇格の基盤となったと見ることができる。

注

¹立正大学宗学研究室(1933)『立正大学創立三十年記念論叢』7頁。

²立正大学宗学研究室(1933)『立正大学創立三十年記念論叢』10頁。

³立正大学宗学研究室(1933)『立正大学創立三十年記念論叢』12頁。

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(36)

学校沿革史にみる補習科・専攻科(32):岡山県(5)

よしの たけひろ
吉野 剛弘(東京電機大学)

今号では、岡山県の補習科の生徒数について検討する。

表 1 は、岡山操山高等学校の 1970(昭和 45)年以降の補習科の在籍者数である。

表 1 岡山操山高等学校の補習科在籍者数

年度	男	女	計
1970(昭和 45)	88	2	90
1971(昭和 46)	82	10	92
1972(昭和 47)	76	16	92
1973(昭和 48)	80	8	88
1974(昭和 49)	102	31	133
1975(昭和 50)	80	12	92
1976(昭和 51)	106	38	144
1977(昭和 52)	112	21	133
1978(昭和 53)	72	20	92
1979(昭和 54)	90	17	107
1980(昭和 55)	87	18	105
1981(昭和 56)	83	35	118
1982(昭和 57)	85	21	106
1983(昭和 58)	94	18	112
1984(昭和 59)	129	43	172
1985(昭和 60)	112	24	136
1986(昭和 61)	95	22	117
1987(昭和 62)	85	19	104
1988(昭和 63)	72	17	89
1989(平成 1)	81	19	100
1990(平成 2)	39	16	55
1991(平成 3)	53	15	68
1992(平成 4)	45	22	67

1993(平成 5)	103	34	137
1994(平成 6)	82	34	116
1995(平成 7)	88	36	124
1996(平成 8)	77	45	122
1997(平成 9)	64	40	104
1998(平成 10)	36	8	44
1999(平成 11)	34	26	60

創立百年史編集委員会編『創立百年史』(岡山県立岡山操山高等学校創立百周年記念事業実行委員会, 1999), p.315 より作成

沿革史では、生徒数の変遷について以下のように分析している。

昭和五十年度に減少したのはこの年国立大学を中心に多数の現役合格者が出たため、昭和五十三年度の減少は共通一次の前年でかけこみ合格者が多く出たからである。平成二年度から三年間は市内に大手予備校が出来てその人気の影響があり、平成十年度はその前年度に現役合格者が多かったから在籍者数も減少した。

(創立百年史編集委員会編『創立百年史』岡山県立岡山操山高等学校創立百周年記念事業実行委員会, 1999), p.315)

生徒数の分析としては、ほぼこの通りである。ここで興味深いのは、教育課程は圧倒的な国公立大学シフトであるにもかかわらず、外的な要因を除いて生徒数に変化が少ないことである。1990(平成 2)年に岡山に進出した代々木ゼミナールは、私立大学文系志願者に人気を博した予備校である。代々木ゼミナールの進出により一時的に生徒数を減らしたが、その後生徒数が回復していることを考えると、補習科への信頼の高さがうかがえるのである。

表 2 は、岡山芳泉高等学校の補習科在籍者数を示したものである。

表 2 岡山芳泉高等学校の補習科在籍者数(4月開講時)

	男	女	計	補習科以外の 受験準備者数	期生
1977(昭和 52)	44	9	53	19	1
1978(昭和 53)	64	19	83	32	2
1979(昭和 54)	59	21	80	35	3
1980(昭和 55)	84	23	107	23	4
1981(昭和 56)	89	20	109	37	5
1982(昭和 57)	80	9	89	32	6
1983(昭和 58)	95	13	108	22	7
1994(平成 6)	62	28	90	37	18
1995(平成 7)	46	30	76	40	19
1996(平成 8)	54	28	82	29	20
1997(平成 9)	41	27	68	34	21
1998(平成 10)	45	22	67	36	22
1999(平成 11)	44	14	58	41	23
2000(平成 12)	37	19	56	33	24
2001(平成 13)	37	17	54	24	25
2002(平成 14)	24	13	37	31	26
2003(平成 15)	51	12	63	27	27

創立十年誌編集委員会編『創立十年誌』(岡山県立芳泉高等学校創立10周年行事委員会,1983),p.96より作成

創立三十年誌編集委員会編『創立三十年誌』(岡山県立芳泉高等学校創立30周年行事委員会,2003),p.136より作成

この表からは、補習科に通わなかった者の数も分かる。補習科に通わずに受験準備にあたった者は30名前後いたことが分かる。表が中断している間に代々木ゼミナールが進出したわけだが、その数に大きな変化はない。

しかし、岡山操山高等学校に比して、補習科の在籍者が減少傾向にあることも事実である。1980年代には100名を越えることもあったが、1990年代以降に100名を越えることはないのである。もっとも、これは少子化による影響も考慮しなければならないので、在籍者数の減少が補習科の不振と等価なわけではない。

表3は、岡山一宮高等学校の補習科在籍者数を示したものである。

表3 岡山一宮高等学校の補習科在籍者数

年度	期数	主任	文系	理系	計
1983(昭和58)	1	入江照堂			119
1984(昭和59)	2	藤田道雄			117
1985(昭和60)	3	山本敦美	59	53	112
1986(昭和61)	4	国末知幸	75	67	142
1987(昭和62)	5	山川勝治	74	40	114
1988(昭和63)	6	安井一夫	74	45	119
1989(平成1)	7	岩井政俊	69	45	114
1990(平成2)	8	奥西健次郎	47	17	64
1991(平成3)	9	山川勝治	71	42	113
1992(平成4)	10	川上克己	56	29	85
1993(平成5)	11	岩井政俊	54	35	89
1994(平成6)	12	塩飽良三	31	27	58
1995(平成7)	13	黒瀬義美	39	33	72
1996(平成8)	14	杉浦公平	44	38	82
1997(平成9)	15	川端顕典	31	33	64
1998(平成10)	16	田淵博道	16	39	55

1983(昭和58)年と1984(昭和59)年の文理の内訳は不明

岡山一宮高等学校編集委員会編『創立二十年史』(岡山県立岡山一宮高等学校, 1999), p.109より作成

ここでは、代々木ゼミナールの進出の際に生徒が激減し、その後完全に回復するには至っていない。殊に代々木ゼミナールが強いといわれる文系の減少が著しいが、一方で理系の生徒数の影響はほとんど見られない。

こうしてみると、岡山県の補習科は、さまざまな外的要因の影響を受けつつも、一定の信頼を得て、安定的に生徒数を維持させてきたことが分かる。岡山市内には5つの補習科があったが、唯一廃止した岡山大安寺高等学校の補習科も、同校の中等教育学校への転換に伴い廃止されたのであって、補習科それ自体の不振が原因ではないことから裏打ちされる。

では、そのような補習科はどのように受け止められていたのか。次号ではその点について検討する。

シンポジウム「知られざる明治期日本画と

「一高」の倫理・歴史教育」に参加して

とみおか まさる
富岡 勝 (近畿大学)

東京大学駒場博物館の主催で2017年12月2日(土)に東京大学駒場キャンパスで開催された記念シンポジウム、「東京大学駒場博物館所蔵第一高等学校絵画資料修復記念 知られざる明治期日本画と「一高」の倫理・歴史教育」に、筆者は発表者として参加する機会をいただいた。

明治期の日本画家の手による歴史画を一高が蒐集したこと(ほとんどが木下広次校長時代)と当時の一高の教育方針との関係を探るため、木下広次の教育方針を再考するという趣旨で発表したが、美術関係の研究者に混じって議論できた経験はなかなか貴重であった。忘れない内に、少しでも記録を残しておきたい。

当日の主なテーマ、発表者等は以下の通りであった(敬称略)。

セッション1「近代日本画としての一高歴史画」

塩谷純(東京文化財研究所)、椎野晃史(福井県立美術館)、
栗林陵(横須賀美術館)

司会:野地耕一郎(泉屋博古館分館 東京)

コメンテーター:古田亮(東京藝術大学美術館)

セッション2「教育史からみた一高歴史画」

富岡勝(近畿大学)、森光彦(京都市学校歴史博物館)、
井戸美里(京都工芸繊維大学)

司会:折茂克哉(東京大学駒場博物館)

コメンテーター:佐藤道信(東京藝術大学)

セッション3「一高歴史画にみる日本、西洋」

高岸輝(東京大学人文社会系研究科)、

三浦篤(東京大学総合文化研究科、駒場博物館)

司会:井戸美里

コメンテーター:佐藤康宏(東京大学人文社会系研究科)

一高歴史画とは、明治期に一高が蒐集し、現在は東京大学駒場博物館に保存されている、上代から江戸時代までの歴史を題材とした約30点の日本画のことである。

セッション1とセッション2の発表、議論を通じて、一高歴史画は、当時の東京美術学校関係の日本画家によって描かれたものであり、題材の選択、技巧上の特徴、西洋画の影響など多くの美術上の興味深いテーマを提示した存在であることが分かった。

セッション3では、一高歴史画を美術上の検討だけでなく、教育史から考えようというもので、森光彦氏からは京都で活躍した画家による歴史画が京都の番組小学校のなかで利用されていた事例が紹介され、駒場博物館での一高歴史画の展示に深く関わった井戸美里氏からは、一高歴史画をめぐる様々な史料(木下が京都帝国大学総長としても歴史画の活用を考えていたことを示す史料も含む)の紹介があった。

筆者は、「木下広次は何を考えていたのか 教頭就任演説が歴史参考室構想にどのようにつながるのか」というサブタイトルをつけ、次のような趣旨で発表した。

帝国大学で評議官も務めていた法科大学教授の木下広次が、第一高等中学校教諭・兼教頭(法科大学教授も兼任、評議官も留任)に任命されたのは、1888年(明治21年)8月10日である(翌年5月9日に教

諭兼校長)。

赴任直後の同年10月1日および3日に、今後の同校の教育方針を宣言する演説(以下「教頭就任演説」と呼ぶ)を予科および本科の生徒たちにおこなった。教頭でありながら、同校の教育の実施的責任者として述べた「教頭就任演説」では、帝国大学側からみた第一高等中学校の教育への不満、倫理科の授業や皆寄宿舍構想などについて述べている。校長の下の役職である教頭でありながら実質的には同校の新教育方針の宣言となったこの教頭就任演説を改めて分析し、倫理科授業の教室の工夫について記した1888年の演説草稿、1889年2月の校旗制定(護国旗)、1890年2月の寄宿舍自治制許可などもあわせて考察しながら、教頭就任時の木下の教育方針が歴史参考室構想にどのようなようになっていったのかを考えていきたい。

発表の中で扱った主な史料は以下の通りであった。

0. 木下広次(1851-1910)の略歴

1. 教頭就任演説(1888年10月1日および3日)
2. 倫理講堂に関する所見草稿(内容的に本郷移転の前なので1888年と推定) 駒場博物館所蔵
3. 教育勅語発布当時の校長訓話の草稿(1890年か) 駒場博物館所蔵
4. 撃剣部秋季大会における木下広次の校友会会長としての演説『校友会雑誌』第10号(1891年10月27日)
5. 「歴史参考室」『校友会雑誌』第34号(1894年2月27日)
6. 「歴史講演会」『校友会雑誌』第14号(1892年2月27日)
7. 「維新史談 本校歴史講談会演説」『校友会雑誌』第23号(1893

年1月27日)

8. 小中村の他の校友会雑誌記事から

1～4までは木下広次に教育方針に関する史料で、これらを紹介しながら、「国家主義を標榜しながら、それを一高生徒たちに押しつけてはならない形で広めようとしていた木下像」が浮かんできた。筆者が以前一高寄宿舍自治成立に関して調べていた時、国家主義的な意識の強い生徒が中心となつてつくれた生徒団体が木下広次の承認を得て寄宿舍の自治的制度を整備していった経緯をどのように捉えていけばよいのか、よく分からなかったが、今回のシンポジウムに参加することでそのヒントが得られたように思う。

5～8は、木下が一高を去った後の歴史参考室に関する史料で、教授の小中村義象(1864-1923)が歴史参考室に関することを中心となつていたことが分かった。ただし、小中村が木下と同じ教育方針で歴史参考室に取り組んだのかどうかは今後の検討課題である。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)

- 1.(目的)広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
- 2.(記事のテーマ)記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
- 3.(刊行頻度・期間)研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
- 4.(編集委員会・編集世話人)発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
- 5.(執筆者)執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
- 6.(記事の責任)記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごまねに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
- 7.(記事の種類・分量)記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
- 8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
- 9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
- 10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
- 11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

ジャポニカ学習帳の巻頭グラビアで40年にわたりインパクトある撮影を続けている、自然写真家@山口進さん。そんな山口さんが、NHK科学番組の企画で「この[共生する]アリの存在を[初めて]知ってから25年目にして、漸く撮影にこぎつけました。小さな[食虫植物]ウツボカズラの中で泳ぎまわる敏感なアリ。撮影は今までになく難しく、苦勞しました。」という。熱帯に生息する食虫植物のウツボカズラと共生するアリの不思議で奇妙な関係を、粘り強い取材の結果ようやく貴重な動画撮影に成功し、我々にその未知な自然界の姿を教えてくださいました。新たな発見や気付きから、また新たな疑問や謎が自然と生まれることでしょう。そんな飽くなき知的好奇心や探究心の繰り返し、継続こそが、精緻なAIにも引けをとらない生きることのダイナミズムかな。(谷本)

年末の帰省。久しぶりの故郷の自然は、物寂しくもあり温かくもありました。山を眺めていると、新しい「あこがれ」が湧いて来るのを感じます。新年に向けてさまざまなことを省みる時間になりました。「ふるさとの 山に向ひて 言ふことなし ふるさとの山は ありがたきかな」(石川啄木)。今年もよろしくお願いたします。

(金澤)。

1月は本務校の自校史授業に2回出講しました。教壇に立つのは久しぶりでしたので初めは緊張しましたが、何とか無事に終えることができました。内容は戦前・戦後の学生生活・文化・スポーツということで幅広かったのですが、おかげで自分自身も学生文化についての理解が深まりましたね。…とはいえ、その授業準備のために原稿が書けず、申し訳ありません。2月からはまた執筆に励みます!

(田中智子)

昨年暮から、築100年以上の木造建築、自治の歴史、のどかな雰囲気などで知られている京大吉田寮の状況が結構厳しくなってきました。わたしも1983年から1989年秋まで暮らしていて様々な経験が出来ましたので、元寮生の一人として気になっています。吉田寮は現役寮生がじっくり話し合っただけでその時々の問題を解決していくのが伝統となっていますから、直接できることは少ないのですが、寮生から協力を求められたら何か協力することがあれば、と考えているところです。以下は関連記事等です。

「京大、吉田寮に退去通知「実態つかめず」 自治会は反発」『朝日新聞』
2017年12月21日

<https://www.asahi.com/articles/ASKDP3S27KDPPLZB00J.html>
「京都大、吉田寮の退去期限通知 寮生は反発「一方的」」『京都新聞』
2017年12月21日
<http://www.kyoto-np.co.jp/education/article/20171220000183>
吉田寮生の見解
<https://sites.google.com/site/yoshidadormitory/>

(富岡)

今年も留学生の短期研修の季節がやってきました。台湾研修生22名、中国研修生67名を連続で受け入れています。4週間で2日の休日設定、その休日も研修生の休日に過ぎないので次の受け入れのための会議や準備作業でまさに忙殺されています。あらゆる事に合理化と省力化を図りながら最大限のおもてなし中です。今期は毎回課題となる宿舎での点呼にテレビ会議ソフトの ZOOM を導入しました。e-learning に興味のある方はすでにご存じのソフトかと思えます。私は11月に前京都精華大学の筒井洋一先生と東京大学の大隅紀子先生の手ほどきを受けて覚えたばかりですが、とりあえず実践あるのみと、導入に踏み切りました。これが頗る便利で、対面式で行っていた点呼は約半分の手間で済むようになりました。正に文明の利器かと、最近では毎晩パソコン画面の前で研修生たちとの会話を楽しんでいます(思わぬ操作をしてくる研修生たちへの対応に苦しんでいるとも言えるかも知れませんが)。(小宮山)

本ニューズレターPDFファイルをダウンロードして印刷される際、Adobe Reader などのソフトの「小冊子印刷」機能を利用して A4 サイズ両面刷りに設定すれば A5 サイズの小冊子ができます。